

# 北九州マイスター生野保幸先生を偲ぶ

福岡職業能力開発促進センター 和田 正博

## 1. 黄色い勲章

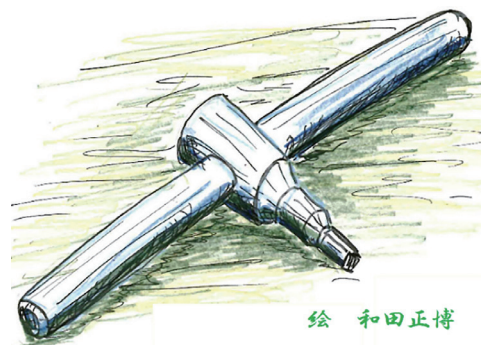
120年を超える産業の歴史を誇る北九州市。今もなお、北九州エリアから世界的なオンリーワン技術を出し続けている。市の誇りをかけて、特に技能技術に抜きん出た現代の名工を顕彰する「北九州マイスター制度」は2001年に始まった。記念すべき第一回、各分野から名工の六名の方々が選ばれたが、機械加工のマイスターとしてその一人に選ばれたのが、当時TOTOに勤めていらしゃった生野保幸先生だった。精密機械加工に精通した卓越した技術者として顕彰されたのである。



生野先生は無類のラーメン好き。私もよく北九州のラーメン屋巡りに同行させていただきながら、いろいろな話に花を咲かせた。あるとき、「天皇陛下から黄色の勲章をもらっちゃったよ」と。驚きのあまり「どこで？」と意味の分からないことを聞いてしまった。「皇居よ」と生野先生。そりゃそうだ。生野先生、黄色の勲章、つまり黄綬褒章を叙勲されていたという。まったく恐れ入り奉った。

## 2. モノ言わずモノ作る人モノ喋る人

その北九州マイスターの優れた技能技術を伝承すべく始まったのが「北九州匠塾」。わがポリテクセンター八幡（現：福岡）も全面協力、と、いうより、全力協力。機械加工、溶接などのコースが開かれた。こんな機会はめったにはない。皆、意気軒高、より良いものにしようと、張り切った。



現代の名工の話を知ろうと、県内の企業から腕利きの熟練工が集まった。開講式にはテレビ放送局や新聞社もやってきた。われわれも身が引き締まる思い。私は生野先生の旋盤コースの担当として補佐をさせていただいた。生野先生の授業は驚きの連続。先生の卓越した神業的な技能、滑らかなハンドルさばきに思わず鳥肌が立った。しかし、最も驚いたのは、教え方伝え方が本当に素晴らしかったこと。周到な準備と仕込みもすごい。発想力、想像力、長年、職業訓練に携わったわれわれも驚かざるを得なかった。

実は熟練した職人の方が講師を務めるセミナーはなかなかうまくいかないことが結構ある。熟練さ

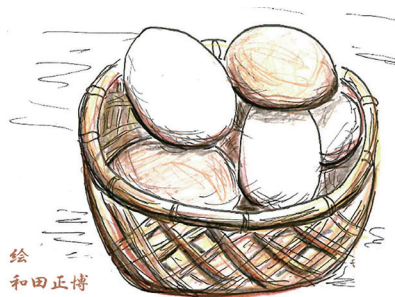
れた技のレベルが高すぎる上に、人前でお話をすることが苦手な方も多く、うまく伝えられないことが多々。

中には受講生とトラブルになり、「来年からは結構ですから」と途中でリタイアされたマイスターもいたくらい。「参りましたね。その点生野先生は素晴らしい」先生に愚痴とゴマすりを並列に言うと、「いままで、黙々とモノ言わずモノ造る人が、モノ喋る人になれという。そりゃ大変よ」とは、シャレた言葉の生野先生。

われわれ職業訓練指導員は、その間を取り持つというか、翻訳家としての役割を担い、補佐をするのが使命なのだが、こと生野先生に関しては、全くそんな心配がいらぬどころか、指導技法に関してわれわれが学ぶところが多かった。とにかく面白いのである。

### 3. たまご

「皆さんは旋盤で何を削っていますか」との問いに受講者の方は「鋼材です」「ステンレスが多いです」「樹脂を主に削っています」などと答える。すると先生は「卵を削っている方は」当然、みんな「え」と、目を丸くして場の空気が一瞬止まる。卵を旋盤で削るなんて話は聞いたことあるわけがない。



すると先生、「では卵を削って見せましょう」一同再び「え」と生野先生、いきなり私を指さし「でも、この旋盤で卵を削ると和田先生に旋盤を汚すと怒られてしまいますからね、今日はその代わりにピンポン玉を削りましょう」そして、工具箱から卵を旋盤に取り付ける自作の治具と、自作の刃物を取り出し、旋盤で卓球の球を本当に削ってしまった。刃物も治

具も切削の基本概念を覆すような柔軟な発想。そして見事な出だしの『つかみ』。感服してしまった。

### 4. スポンジの発想力

次の日には、「みなさん、難削材を削っていますか」と生野先生が聞く。受講生は「マルテン系のステンレスを削っています」「耐熱鋼のハステロイにてこずっています」「純銅がややこしくって」すると、突然先生が手品のように食器洗い用のスポンジをポンッと出す。「え」皆さんあっけにとられる。「スポンジを削ったことはありますか」あるわけがない。「このスポンジを精度良く加工しようとなると、これが難削材になるんですよ」「いやいや、先生、スポンジが削れるんですか?」「では、といいながら、これまた自作の刃物を機械に取り付け、薄い切子を出しながら削ってしまった。「難削材」といって皆さん堅いイメージをお持ちでしょうが、こんな柔らかいスポンジも難削材といえる。皆さんの発想もスポンジのように柔らかく。どうですか?面白いでしょう」はいはい、面白いです。こんな調子のセミナーは爆笑の連続。もう生野先生、受講生の心を「わしづかみ」。受講生どころかわれわれ補佐の指導員の心も「わしづかみ」。福岡県内から集まってきた腕に覚えのある熟練工の皆さんの目が、あたかも好奇心おおせいな少年時代の目の輝きを放っていた。

あれから二十年。たった数日のセミナーだったが、受講生やわれわれ指導員の胸の深いところに、生野先生が下さった宝物が宿ったと思う。当時の受講生の方々がその後、県内各地で多くの道を切り開いていかれ活躍されている。そして、その一人一人が後継の技能技術者を陸続と育てていることを実感したのは、ごく最近だ。人材育成の清流は連綿と受け継がれている。

### 5. 啐啄同時（そったくどうじ）

ポリテクの実習場でうちの指導員が受講生に旋盤を教えていた時のこと。実習場の隅の旋盤で生野先生が匠塾の授業の準備をされていた。授業をしてい

た指導員は勉強熱心で優秀な人。いろいろな情報を加えながら、作業の手順を受講生に説明していたのだが、生野先生がため息をつきながら「教えすぎよ。しゃべり過ぎ。あれじゃ生徒さんが消化不良を起こしてしまうよ。」とソケットレンチを回しながらこぼされた。みると喰いつくようにうなづく人もかなりいるが目泳いでいる人がかなりいる。一部の受講生が消化不良を起こしているのを生野先生のセンサーが反応していたのだ。



絵 和田正博

先生は人材育成についていくつか言葉を残されている。「答えを持つ側、すなわち教える側が、答えを持たない人、すなわち教わる側に、答えを分け与えるような教育では、受け身のままで、自主独立の精神が育たない。答えは教わる人の中にすでに内在している。答えを自ら生み出すとその人の身につく。それをいかにサポートするかが大事だ。啖啄同時（そったくどうじ）だ」

これは耳の痛い話。わがポリテクセンターの指導員は非常によく勉強し、知識も豊富な方が多い。それはわれわれの誇りでもあるが、ともすれば、それがあだになって、受講生が消化不良の原因になることがある。うちの指導員はとても親切。中にはわからなくても質問もしない受講生がいて、われわれは、手元が止まっていたり、顔色で行き詰まっていたりを察知し、声をかけて、手取り足取り教える。もちろんそれに対し、多数の毎回感謝の声をいただいている。が、中にはそれでも教え方が悪いからわからなかった、あるいは、あの人に教えていたのに、私には教えてくれなかったと文句を言う人も出てくる。受講生が与えられることに慣れきってしまい、

自己解決能力を失っている例だ。手取り足取り教えてくれる、やさしい先生がいる訓練中はいい。就職後、戦場のような現場に入って、ぼーっと自分がわからないことを察知する人が現れるのを待ったりする新入社員になってしまわないだろうか、心配な受講生がいる。実際、せっかく就職できたのに、さまざまな課題を自己解決できず、離職する受講生は多い。これはわれわれ指導員が反省すべきだと考えている。困り顔をしていても、自ら質問できるまで待つ、『質問力』も受講生が自ら道を切り開く力の一つになる。苦しみながらも答えを自ら出すまで待つ。忍耐力が指導員にも必要。

生野先生は受講生が自ら答えをつかもうとする原動力をいかに引き出すかを常に苦心しておられた。工夫に工夫を重ねていた。その原動力のカギが好奇心、探求心。壁の向こう側に何かあるかを見てみたい。という受講生の内在された心を先生は上手に引き出しておられた。まさに啖啄同時（そったくどうじ）である。

## 6. 九仞の功を一簣に虧く (きゅうじんのこうをいっきにかく)

生野先生は、TOTO退職後、付加価値研究所を立ち上げられ、沖縄など、日本各地で後世の指導に力を注いでおられたが、令和元年11月6日、肺炎でこの世を去られてしまった。あまりにも急な死だった。もう一度先生とお仕事を一緒にしたかった。

せめてもの救いは、「左甚五郎（ひだりじんごろう）」の最初の草稿を、亡くなる半年前に先生に届けることができたこと。「左甚五郎」とは私が職業訓練大学の機械科の学生だったころ、恩師の海野邦昭先生に教えてもらったお話で、江戸時代の大工の名人のお話。左甚五郎が生野先生に像が重なるところが多々。私が書いた拙筆である。真っ先に先生に読んでいただきたかった。

私が単身赴任先の大分から福岡に帰ってこられたご報告と共に、草稿をメールに添付して送付したのは2019年の4月23日。1時間もしないうちに返信のメールをいただいた。「ご帰還おめでとうございま

す。和田先生が言われるように郷に入れば郷に従えが正解ですね。ジワッとじっくり仕事をすれば実習生はついてくると思います。《甚五郎》の創作文一簣に読ませていただきました。面白かったです。折を見て（ラーメン）工房龍に行きましょう」と。「九初の功を一簣に虧く（きゅうじんのこうをいっきにかく）」の「一簣」という文字が使われたところに先生の深い思いが込められたのだと、気が付いたのはうかつにも先生の死後。すでに、この頃はお身体が悪かったのではないだろうか。なのに、いろいろ私のことを心配してくださっていた生野先生。私にとっては一回り年上の優しい兄だった。最後になった、この暖かいメールは私の一生の宝だ。

## 7. 冥土へのメール

奥さまから訃報の手紙が入ったのは、2020年の正月が明けたころ。茫然自失、ただただ言葉を失った。もっと先生に教わるべきだった。もっと先生とともに行動するべきだった。もっと早く先生の所に行くべきだった。しかし、取り返しのつかない後悔になす術はない。冥土の先生にメールは届くのだろうか、以下のメールを生野先生に送った。

「生野先生、昨日、先生の訃報が届きました。生前の約束が果たせず、残念至極。せめてもう一度お会いしたかったです。お体も悪く、きつかったのでしょうね…

先生の教えてくださったこと、もう一度おさらいして身につけ、これからも頑張ります。先生が残してくださった工具、私のほうで管理させていただこうとおもいます。

お墓のほうには後日お伺いいたします。ラーメン工房龍にも先生をしのんで行こうと思います。せめてもの救いは左甚五郎の冊子を先生に送ることができたことです。先生は現代の左甚五郎でした。

生前のご厚情に心より御礼申し上げます。ありがとうございました。取り急ぎ御礼まで。」

私にも、もうすぐ還暦が来る。わが身を振り返ると恥ずかしいくらい先生の足元にも及ばない。引き続き精進を重ね、私も道を切り開いていきたいと

思っている。

令和三年十一月六日、生野先生の三回忌に

和田正博

## 8. 生野保幸先生略歴

1950年、北九州に生まれる。

1965年、東洋陶器（現TOTO）に入社。

銅合金の鏡面切削加工、光通信事業のコスト改善や新素材の加工技術開発業務に携わる。

この間、技術考案賞はじめ数度の社長賞受賞

2000年、福岡県版『現代の名工』に。

2001年、第1回 北九州マイスター認定。

2002年、福岡県優秀技能者県知事表彰

2003年、厚生労働省『現代の名工』受賞

2004年、文部科学大臣表彰。

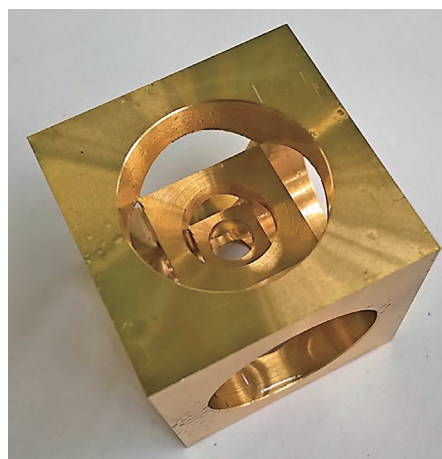
2005年、平成17年度『黄綬褒章』叙勲

2010年、付加価値創生研究所、創設

2019年11月6日、死去。享年69歳。

## 9. 生野先生の遺作

【先生の遺作の作品；真鍮の三重のサイコロ】



生野先生は真鍮加工の神様。中の立方体は八つの隅を最小0.03mm程度で支えている。素材に切削力の負担をほとんどかけずに削り出しているのだ。さらには制作後10年以上たっているのに表面が変色していない。この表面性状ばかりはどうしてもまねができない。先生は、手研ぎのバイトで真綿のような

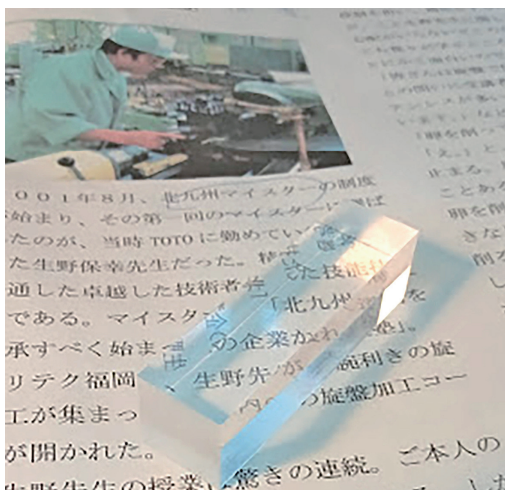
流れ型の薄い切り子を出しながらこれを削っておられた。生野先生の長年の技能技術の開発の歴史の一端を伺うことができる作品である。

#### 【先生の遺作の作品；瓢箪から駒】



生野先生は、それを見る受講生たちが機械加工に興味を持つようにシャレの効いた作品をたくさん作られた。ひょうたんの中に10mm程度のかわいらしいひょうたんがコロコロ入っている。

#### 【先生の未完の遺作；アクリル角棒】



生野先生は切削加工での鏡面加工を得意とされていた。切削だけで恐ろしいほどの透明感を蓄えた未完のアクリル棒。先生はこのアクリルを使って何を作ろうとされたのだろうか。

#### 〈脚注〉

##### 【啐啄同時；そったくどうじ】

学ぶ者と指導者の呼吸がぴったり合うこと。

「啐」は、雛がかえろうとするとき、殻の中で泣く声のこと。「啄」は、親鳥が卵の殻を外からつついて、雛が出てくるのを助けること。弟子が悟りを開くまであと一歩というとき、師匠がすかさず指導して悟りを得られるようにすることをいう。

##### 【九初の功を一箕に虧く】

山を為つくるに九初なるも、功を一箕に虧く（九初の盛り土を造るときに、最後のもっこ一杯分を残してやめてしまったは、造り上げたという功績は得られない）」とある。「九初」とは、当時の尺度で、約18メートル。「箕」は、土などを運ぶための道具。もっこのことです。

#### 【事務局からのおしらせ】

文中に出てくる「左甚五郎（ひだりじんごろう）」のお話を次号よりシリーズ掲載いたします。